

令和3年度中学校武道授業（銃剣道）指導法研究事業



短剣道授業：面打ちの体験

令和3年度中学校武道授業（銃剣道）指導法研究事業〔主催＝日本武道館・全日本銃剣道連盟・日本武道協議会、後援＝スポーツ庁、協力＝勝浦市立勝浦中学校（千葉県）〕が、12月10日から12日の3日間、千葉県勝浦市の日本武道館研修センターにおいて実施された。

スポーツ庁が令和元年度から実施している、外部指導者を活用した複数の武道種目を選択する「武道推進モデル校」のさらなる拡充に向け、全日本銃剣道連盟が作成した授業指導案を検討。勝浦市立勝浦中学校の生徒（13名）の協力を得て、模擬授業を展開した。

■初日（12月10日）

開講式では、はじめに鈴木健すずきたけし全日本銃剣道連盟副会長兼専務理事、吉川英夫よしかわひでお日本武道館理事・事務局長が、それぞれ主催者挨拶を述べた。

開講式終了後は、翌日の模擬授業の展開について話し合いを行い、武道推進モデル校において外部指導者を活用した銃剣道授業を「2年目の体験」と位置付け、全日本銃剣道連盟が作成した2時間用の指導案をもとに、学習内容を検討した。

また、初めての試みとして、短剣道の体験授業を2時間用の指導案をもとに検討。銃剣道との違いや生徒が理解しやすい説明の工夫など、研究者自ら生徒役と指導役に分かれて検討を重ねた。

■2日目（12月11日）

2日目は、勝浦中学校剣道部の協力のもと、はじめに銃剣道の体験授業が行われた。指導役として教員に菊池聡きくちさとし研究者、外部指導者に滝沢元気たきざわげんき研究者と田村聖一たむらせいいち研究者、支援者に清水陽介しみずようすけ研究者が就き、木銃の持ち方から始まり、「構え」や「直れ」、「足さばき」や「突き」の指導が行われた。銃剣道の「構え」は、左足を前に出すため、始めのうちは剣道との違いに戸惑う生徒も見

受けられたが徐々に慣れてきた様子であった。

その後は、投げたボールを突く練習や、新聞紙を突く練習、さらに2年目の体験授業を意識した発展的な内容として、移動しながら3枚の新聞紙を連続して突く練習が行われた。指導者からは、スピードと正確さを意識するようにアドバイスがあった。最後に指導者の突き部位の左胸を突かせ、新聞紙突きやボール突きとは異なる感覚を体験してもらった。

午後の短剣道体験授業では、指導役として教員に清水研究者、外部指導者に石川慎也いしかわしんや研究者と千葉隆ちばたかし研究者、支援者に菊池研究者が就き、はじめに「構え」や「足さばき」を行い、剣道と同じ点や異なる点を説明した。剣道に比べて竹刀が短く扱いやすいこともあり、動作をすぐに体得する生徒が多かったのが印象的であった。

面打ちでは、新聞紙を切ったり、投げたボールを打つ練習を行った後、元立ちが面の高さに構えた短竹刀を打たせてみたが、動きながら面を打つと空振りする生徒が多く、相手との距離間に苦労している様子が見て取れた。

終了後は、生徒のアンケート内容も踏まえ、研究協議が行われた。銃剣道では「構えの姿勢で木銃を長い時間持つのがつらかった」との感想が多かった点について、子どもの体力低下も考慮し、基本的な指導は短くし、ゲーム的要素を多く取り入れても良かったのではないかと改善点が示された。短剣道は、生徒も親しみやすく、授業に導入しやすいのではないかと意見が寄せられ、今後の発展性が期待できる内容となった。

■3日目（12月12日）

最終日は、滝沢研究者が令和元年度に新潟県内の2つの学校で実施した銃剣道授業（体験）の実践報告が行われた。

そのうち、特別支援学校の実践では、「個々の障害の程度や性格等も考慮しながら、『武道を知る』というねらいのもと、2時間の授業を行った。生徒は見たことのないものに取り組むことができる純粋な気持ちや憧れもあり、表情が豊かであった。障害者を対象にした指導では、特にねらいを明確にした上で、生徒たちに見通しを持たせることが大切なのではないか」との報告があった。

閉講式では石川研究者が講評を行い、全日程を終了した。